

仙台市文化財パンフレット第25集

タイムカプセル

な か け み な み

中在家南遺跡

—— 若林区荒井の河川跡から発見された千年の遺産 ——



荒井の集落と中在家南遺跡・押口遺跡
—— 豊富な地下水が木製品を2000年間も守り続けた ——

発行：〒980-091 仙台市青葉区国分町三丁目7-1 ☎261-1111

仙台市教育委員会文化財課

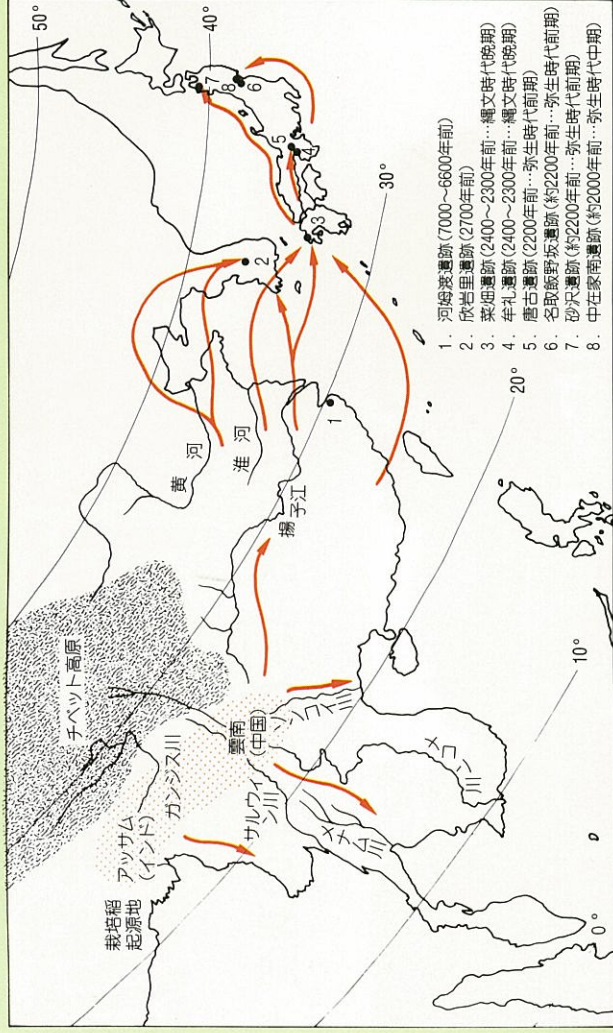
発行日：平成3年3月15日

印刷：針生印刷株式会社



仙台市教育委員会

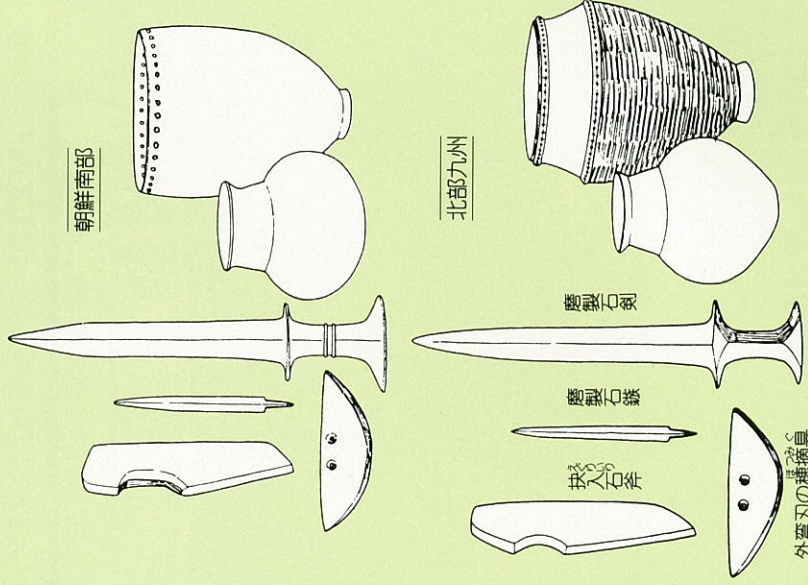
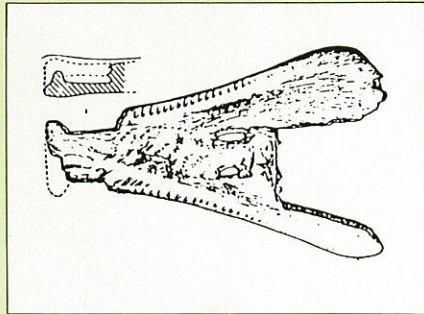
稲作文化の東進



稲作の伝播ルート

日本に伝わった栽培稲の起源地はインド東部から中国南部にかけての地域と考えられている。中国大陸東部の河姆渡遺跡では約7000年前の稲作文化のあとが発見されている。中国東部の稲作農耕は朝鮮半島を経由して、約2400年前に九州北部に伝わり、時を経ずして東北北部まで達し、日本文化の基礎となった。

河姆渡遺跡の骨製鋤
 (別の柄をひもでしばりつけ、シャベルとして使用した)



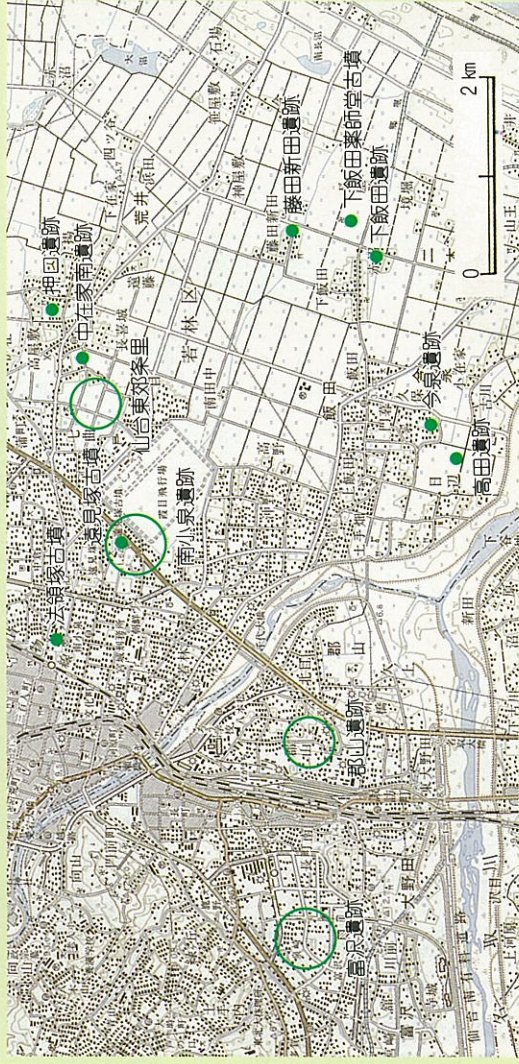
外湾刃の穂積具
 稲作が伝わった頃の朝鮮南部と九州北部の道具は類似する
 (国立歴史民俗博物館展示解説より)

中在家南遺跡の位置

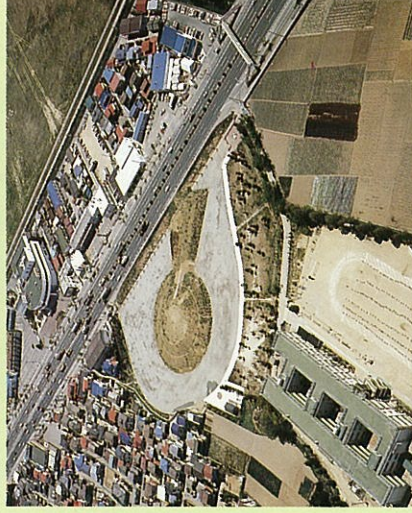
中在家南遺跡は長久な稲作農耕の伝播ルートの東端にあたり、仙台平野で稲作が開始されて間もない約2000年前から遺跡が形成される。「稲作栽培の伝播の終点」とも、「仙台平野の稲作栽培の原点」とも考えられる。出土した弥生時代の農具は、伝播過程の数千年をかけて培われた当時の技術の粋であったろう。農耕文化は水田の拡大とともに発展し、古墳文化や後の時代へと受けがれていった。



富沢遺跡の水田のあと (弥生時代)



中在家南遺跡と周辺の遺跡



遠見塚古墳 (約1600年前の大墓族の墓)



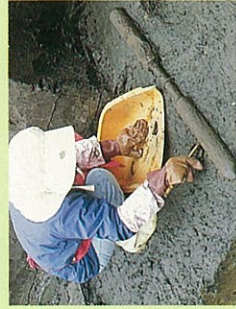
南小泉遺跡の住居跡群 (平安時代)

中在家南遺跡の調査

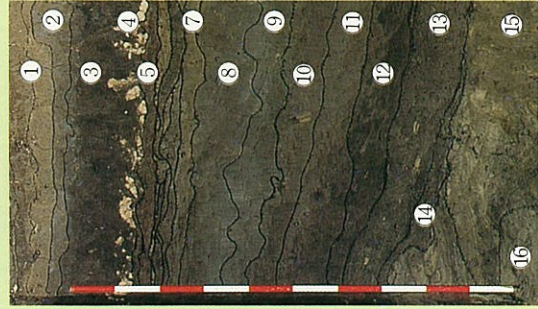
中在家南遺跡は河川跡とその両岸の自然堤防にわたって立地している。調査は1988年から継続的に行われている。

河川跡

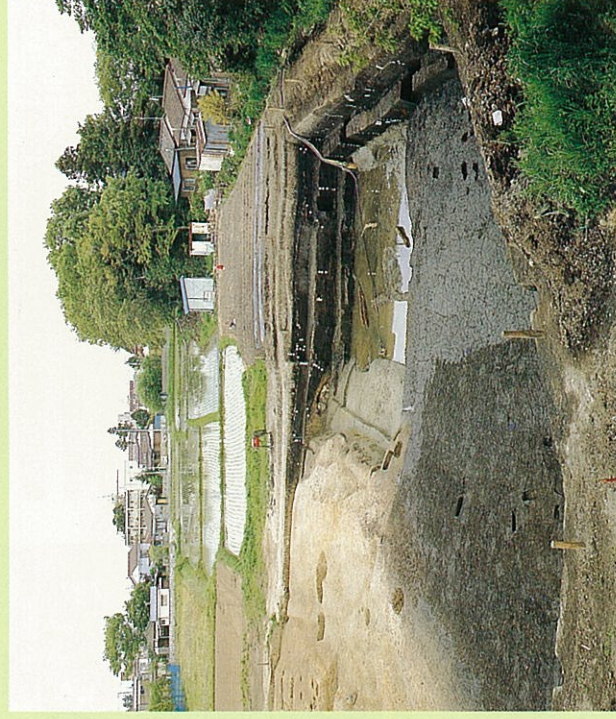
河川跡は幅25m・深さ2.5mあり、弥生時代から近世に至るまでの千数百年間かかって埋没している。埋まった土は16層に分けられ、木製品を主とする多くの遺物が出土した。この河川跡は押口遺跡へ続くと推定されている。



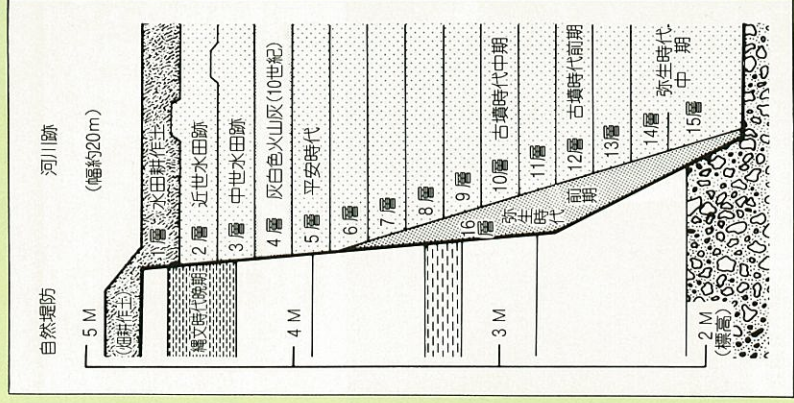
弥生時代の杵の発見



中在家南遺跡の河川跡の土層断面



中在家南遺跡の河川跡とその調査風景



土層断面の略図



平安時代の土器



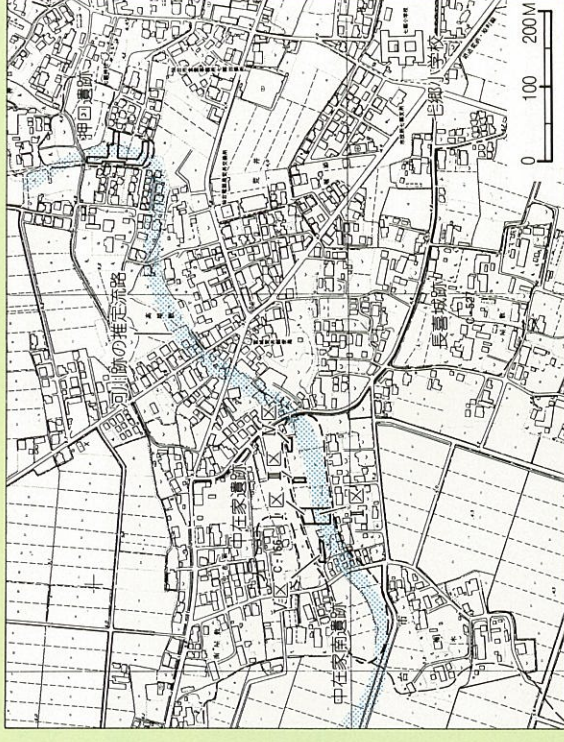
古墳時代の土器



弥生時代の土器

自然堤防

河川跡北側の自然堤防部は、周囲より50cmほど高く、弥生時代以降の各時期の遺構が検出されている。注目される遺構に弥生時代の墓跡群がある。墓跡には長さ230cm程度の穴による「土壇墓」4基と、壺形土器にかめ形土器で蓋をした土器棺1基がある。土壇墓の1基から玉類や石斧(13ページ右2点)が出土している。



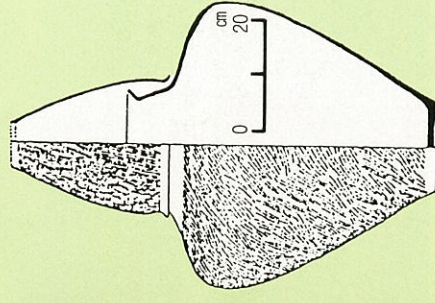
中在家南遺跡・押口遺跡と河川跡の推定添路



弥生時代の墓跡群



上部がけずられた土器棺墓



南小泉遺跡出土の土器棺



土こう墓の調査風景



墓に副葬された玉類

押し口遺跡の調査

押し口遺跡は中在家南遺跡の北東約500mに位置し、幅約20m・深さ2.8mの河川跡が検出された。この河川跡に埋まった土層も16層に分けられ、各層は土質や出土遺物の時期が中在家南遺跡の河川跡に極めて類似する。このことから両遺跡の河川跡は同一のものであると推定される。

押し口遺跡からも多数の木製品が出土している。



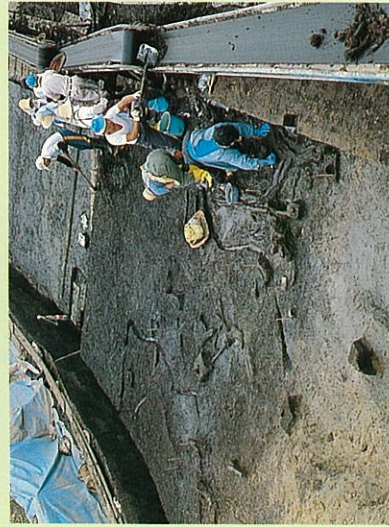
押し口遺跡の河川跡



①平安時代に降下した火山灰の除去作業と見学会

発掘調査の手順

遺跡を発掘調査するときは、ただむやみに土を掘ってはいけません。土層の変化を慎重に観察しながら、上の地層から順に「未知の歴史」の『本』をゆくようにしていきます。そして現在から遠い過去に遡りながら、その遺跡に残された歴史のストーリーを、読み飛ばしたり、読み誤らないように細心の注意をしながら進められる。



②古墳時代の地層と遺物の検出作業



③弥生時代の地層の除去と河川底面の検出作業

弥生時代の木製品(1)……今から約2000年前

弥生時代の木製品はいずれも中期のものと、広楕円形の狭楕円形の掘り棒・掘り棒・斧の柄・臼・整杆・容器類などがある。これらの中には製作途中の未製品もある。広楕円形の掘り棒など東北地方で初めての発見も多く、農耕具の歴史を知る上で貴重な遺跡であることがわかった。



広楕 (未製品)
土をけすたり、移動するのに使用した。



広楕 (2連の未製品)



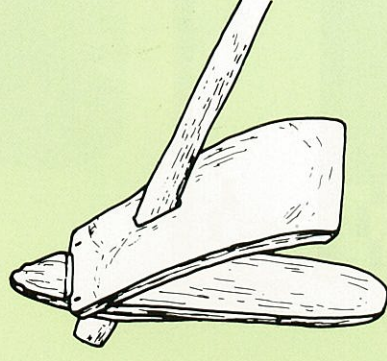
狭楕 (長方形のもの)
土を反転・耕起するのに使用した。



狭楕 (だ円形のもの)



掘り棒 (未製品)
根菜類やしいも掘りに使用した。



狭楕に泥除けをつけたようす

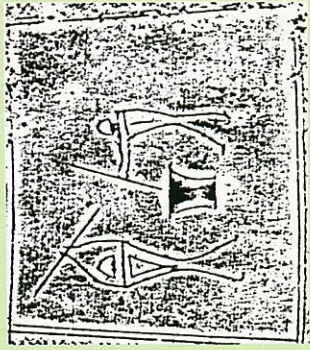


泥除け
楕に取付けて泥がつかないようにした。

弥生時代の木製品(2)



臼
白と杵は脱穀(籾殻を穀粒からとりさること)に使用された。



銅鐸に描かれた弥生時代の米つき



杵



臼付きの浅鉢



杵の直柄
13ページ左のような大型の石杵をつけて木の浅鉢・切断用に使われた。



杵の頭部



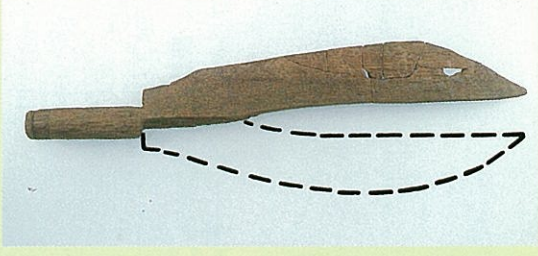
杵の直柄
片方の石杵をつけて加工用に使われた。

古墳時代前期の木製品……約1700年前

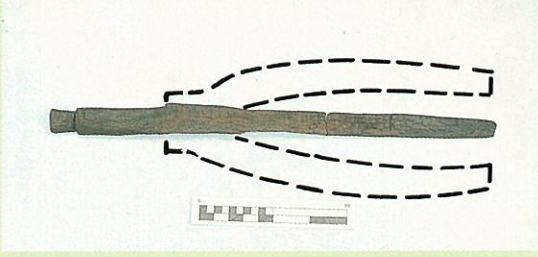
古墳時代前期の木製品には、鋤・広股・三股・二股・一股の柄・三股・二股・一股の柄・横杵・掘り棒・堅杵等がある。この時期には弥生時代の狭股にかわり、漆柄杵が耕起具の主役となる。漆柄杵は図のような曲がった柄をしばりつけて使用した。



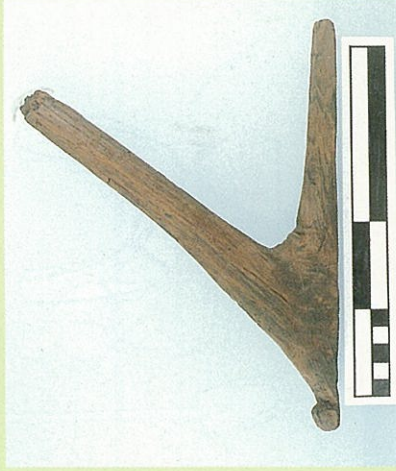
鋤



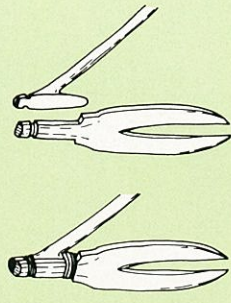
二股柄杵



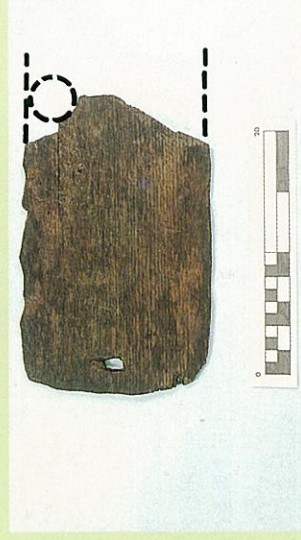
三股柄杵



杵の漆柄



漆柄杵と
漆柄の組
合せ方法



横杵



広杵



横杵

古墳時代中期の木製品……約1600年前

古墳時代中期の木製品には、鋤・二股膝柄鋤・横鋤・鎌の柄・槌・掘り棒・弓などがある。この時期の鋤の刃先には鉄製の刃先がつくように加工され、農耕具にも鉄製品が普及しはじめた。このような農耕具の発達が見塚古墳のような大規模な土木工事を可能にしたと考えられる。弓は漆塗りの精巧なもので、武器として使用されたものである。



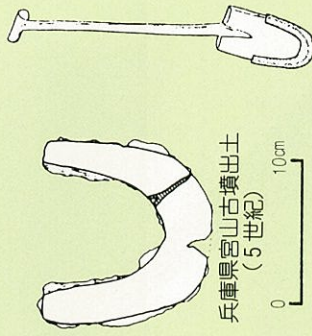
鎌の柄



鋤 (鉄製の刃先を付けて使用した)



横鋤



兵庫県宮山古墳出土 (5世紀)

鉄製刃先と使用例



槌

削り出しの丸木弓で黒漆が塗られている。握部には漆を塗る前に糸が巻かれている。

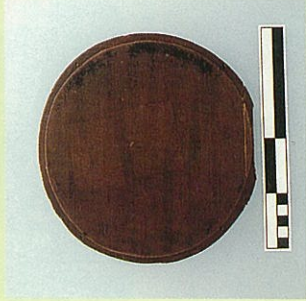


握部の拡大

平安時代(約1000年前頃)と中世(800~400年前)の木製品

平安時代

平安時代以降になると木製品をはじめとする遺物の出土量は少なくなる。この時期のものとしては「曲物」と呼ばれる

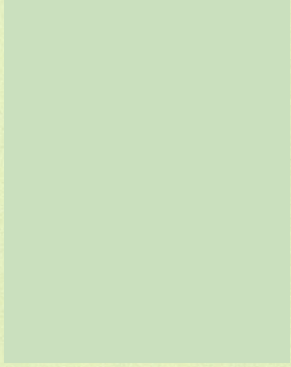


「曲物」の底板

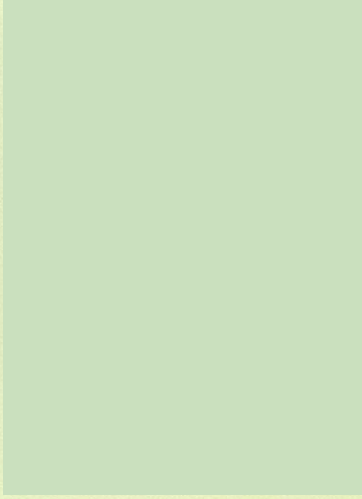
「コロバシ」と呼ばれる大きな歯車のような田ならしの道具が出土している。コロバシは近年まで使われていた。



コロバシ



「コロバシ」で田をならすようす (「奥民図彙」より)



近年に使われたコロバシ (遠野市)



鉄斧の柄

中世

中世ごろに河川跡にたまった土層は、近世になってから水田の耕作土として掘り起こされたため、この時期の木製品は極めて少ない。形がわかるものには、袋状鉄斧用の柄と千駄がある。

水田の営みと農耕具

現在の米作りは機械化が進み、人手もかからなくなってきた。絵は近世の稲作の1年間の仕事の様子、写真は機械化以前の農作業風景で、畜耕も行われた。しかし、作業のほとんどは多くの労働力を必要とし、使用されている木製農耕具の形態も、弥生時代の伝統を受つぐものも存在していた。

春 -1 苗作りから本田作り

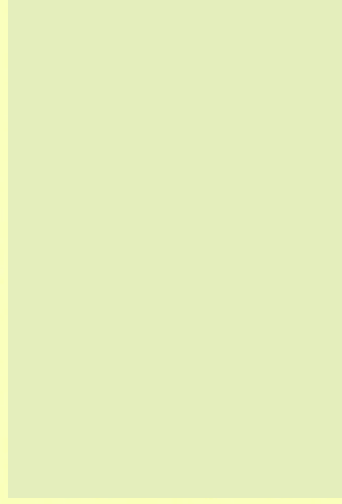


初を蒔く

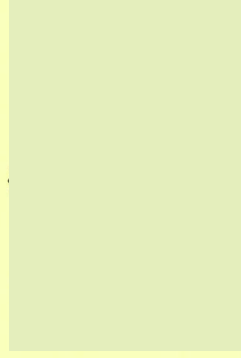
苗に糞肥をやる



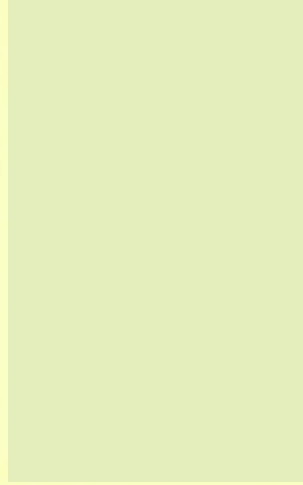
鍬で田の土を起こす



刈 藪
(田に肥料となる草を入れる)



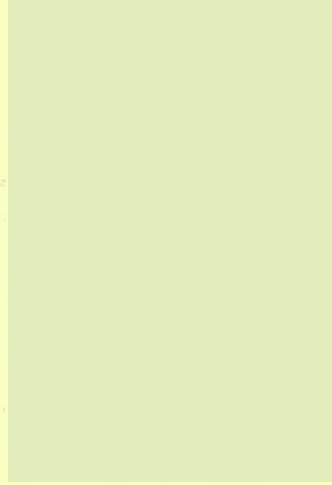
鍬で田の土をならす



鍬による田起こし



馬を使った代掻

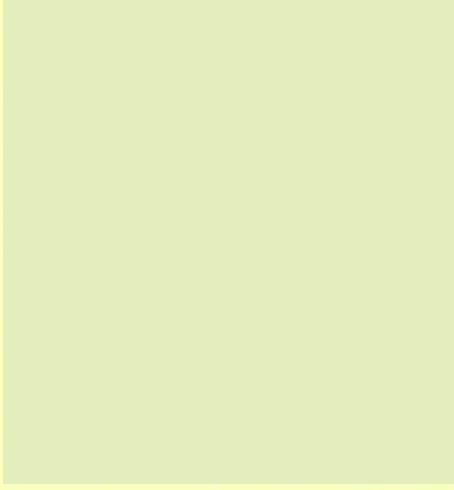


エフリ（横鍬）による田ならし

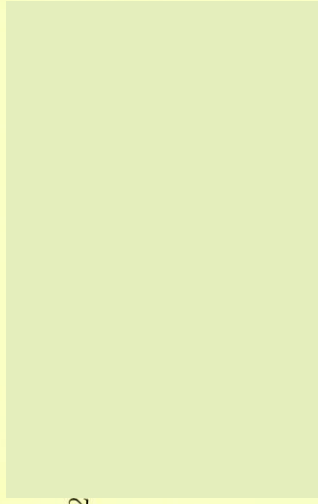
(写真は加藤治郎氏（東北農業技術史調査所）提供。
絵は農書「成形図説」・「民家俵労働」等より。)

春 -2

田植え



手で苗を植える

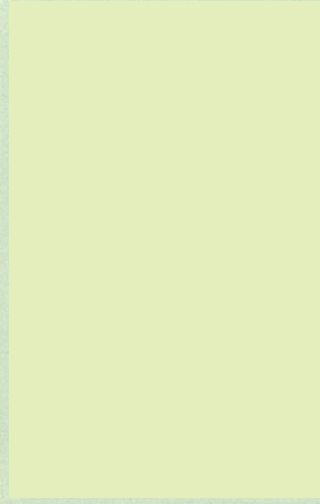


多くの人が並んで作業

夏 除草



雑草を手で取除く



かがむと稲の先が顔にささる

秋 収穫



稲を刈り束ねる

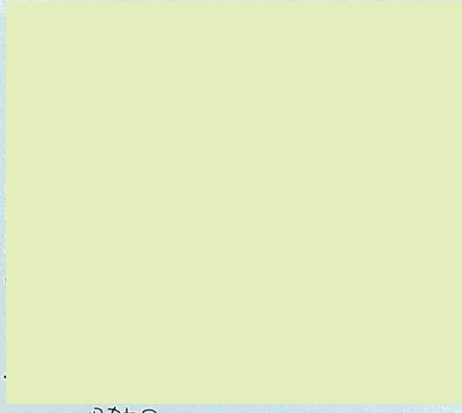


鎌で稲を刈取る

冬 脱穀



稲から籾をはずす（千歯扱きなどを使う）

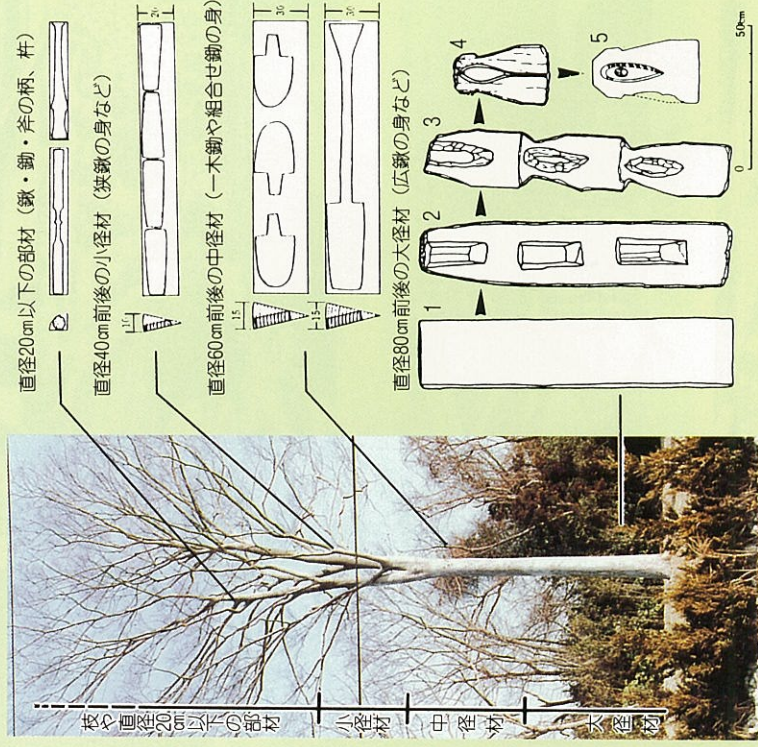


籾の殻を取除く（臼・杵などを使う）

弥生時代と古墳時代の木工技術

弥生時代

縄文時代は「丸太材」が主として使われていたが、弥生時代になると稲作農耕文化に伴って「板材」から様々な製品を作れる技術も伝わった。しかし、種類が増えたとはいえ、加工具は石斧が主体であった。石斧の刃物としての有効性を高めるために、当時の人は、材料を「水漬け」して加工を繰り返す技術を考えた。このため同期の地層からは未製品も多く出土する。



一本の木の利用と弥生時代の鉞の製作工程



中在家南遺跡出土の各種の石斧
大型鉞 刃石斧は伐採・切断用、扁片状刃石斧は別り作業用、ノミ形石斧は細部の加工用に使われた。



① 柄孔の位置を決めた原材料

中在家南遺跡出土の泥除けの製作工程
未製品の存在により、製作工程が復元できる。



② 大体の形ができた段階



③ 完成・使用された製品

古墳時代

古墳時代になると弥生時代にくらべ、鉄器の量産体制が確立する。これに伴って、武器をはじめ農具・工具の鉄器化がはかられる。木工具も石器から鉄器に変わり、種類も増える。木工具の鉄器化による技術の進展は精巧な製品を生み、同時に水漬けと加工の繰返しの工程を不要としたため、河川跡からの未製品の出土を著しく減少させることにつながった。

古墳時代の鉄製木工具
(世界考古学大系3 日本Ⅱ 古墳時代より)



なめらかな面と鋭い角の古墳時代の加工痕



古墳時代の弓の
繊細な加工痕



荒々しい切断痕と凹凸の著しい弥生時代の加工痕

終わりに

中在家南遺跡で発見された河川跡は、木製品の宝庫であることがわかった。今後は、必要な調査を実施するとともに、保存にしていきたい。